

ここまで分かった！ 蔵王山麓の縄文時代

一里山を育み、里山に生かされた縄文人の暮らし



松川沿いの台地上には縄文時代中期に3つの拠点集落が続けて営まれ、約1,000年間にわたる居住史が刻み込まれました。

東北地方を南北500kmにわたって縦断し、東北の背骨とも言われる奥羽山脈。その中央部に位置する蔵王連峰は刈田岳(標高1,758m)、熊野岳(1,840m)、屏風岳(1,825m)を主峰とする複合火山群で、東西約22km、南北約46kmに及ぶ堂々たる山容を誇ります。

蔵王山麓における人々の暮らしは、今から約2万年以上前の旧石器時代に遡ります。当時の人々は、まだ土器や弓矢を知らず、獲物を求めて遊動生活を送っていました。彼ら狩人たちにとって獲物を追うことと同じく重要だったのは、狩りの道具である石槍の材料を得ることでした。蔵王連峰の西、最上川が開析する出羽山地一帯は、その材料である良質な珪質頁岩の一大産地でした。狩人たちはその珪質頁岩で石槍を作り、

それを携えて蔵王連峰を越え、太平洋側へも遊動生活を展開させました。既に旧石器時代には、蔵王山麓周辺は人々が生きていく上で重要な場所だったのでした。

約16,000年前になると、人々は土器を使い始め、弓矢による狩りを行なうようになります。縄文時代の幕開けです。やがて氷河期が終わり温暖化によって豊かな恵みをもたらす森が広がると、人々は竪穴住居を中心としたムラを作り、定住生活を始めました。

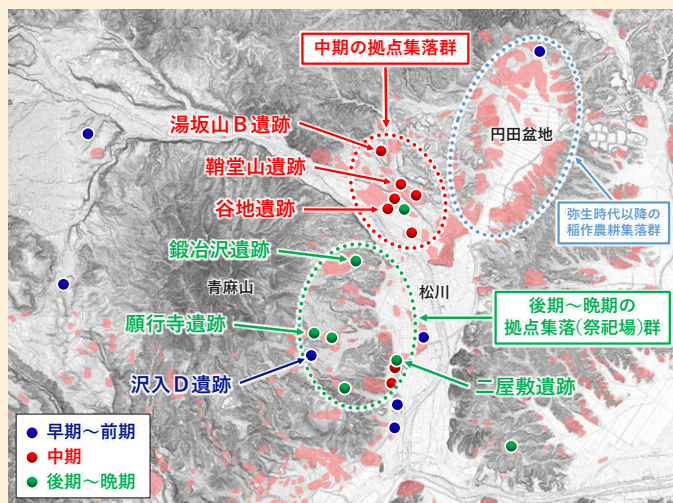
そして、約5,000年前の縄文時代中期、南東北の蔵王山麓を中心とした地域に、強い独自性を持った一つの文化圏が成立します。装飾性豊かな土器や独特の感性を表現した土偶など、現代の私たちの心をも強く魅了する数多くの傑作を生み出したのです。

蔵王東麓の縄文遺跡群は何を語るか？

蔵王東麓の松川流域にある蔵王町には、数多くの縄文時代の遺跡が残されました。それらの分布を見ていくと、ムラの立地が時期ごとに変化したことが分かります(下図)。縄文時代の早期から前期にかけては、中・小規模のムラが広範囲に点在して営まれてきましたが、中期になると松川沿いに多くの遺跡が集中して残され、大規模な拠点ムラが営まれたことが分かっています。これらが立地するのは、松川が運んだ土砂が堆積してできた平らな地形が広がる台地(河岸段丘面)です。現在は町の名産である桃や梨などの果樹園と畑が広がる段丘面は、水はけが良く水場へ近いなど、当時の大きなムラの立地に適していたのです。

今のところ町内で最初の定住集落と考えられる早期の沢入D遺跡では、採集したクリを保存食として加工して利用していました。中期の谷地遺跡では、集落の周囲に人工的なクリ林を計画的に育成・管理するようになり、食用利用と木材利用とを両立させていたことが分りました。縄文人は里山を育み、里山に生かされていたのです。

松川沿いに大規模な拠点ムラが営まれた中期は、安定した気候と豊かな自然環境に恵まれて縄文文化が繁栄のピークを迎えた時期とも言われています。中でも規模の大きな三つの拠点ムラは、三段の段丘面を下から順に谷地遺跡→鞆堂山遺跡→湯坂山B遺跡と移転しながら営まれたことが分かっています(表紙写真)。



蔵王東麓の主な縄文時代遺跡の時期ごとの立地の変化。中期と後期～晩期では立地の傾向が変化しています。弥生時代中期以降に米づくりのムラが営まれる円田盆地は、縄文時代には落とし穴猟などの狩猟場として利用されていました。

ムラを移転した理由は判然としませんが、大規模なムラが継続することによる周辺環境の悪化、あるいは蔵王火山の活動に伴う松川流域の生態系への影響など、現代にも通じる環境問題があったのかもしれない。

やがて、中期末に地球規模で起こった気候の冷涼化を契機とするように、それまでの大規模な拠点ムラは作られなくなります。これに伴って居住の場が小規模分散化する一方、後期から晩期にかけて葬送や祭祀に関わる祈りの文化をさらに発達させ、大規模な墓域や祭祀場を共同で営むようになります。町内では、松川からやや離れた高台や青麻山東麓の谷に面した緩斜面にムラが営まれ、二屋敷遺跡や鍛冶沢遺跡ではまつりを行なう共同祭祀場が作られました。

北東北で環状列石(ストーンサークル)、北陸で環状木柱列(ウッドサークル)が祭祀場として盛んに作られた頃、蔵王町の鍛冶沢遺跡や福島市宮畑遺跡など南東北では、「環状建物群」が作られました。中期に成立し、土器や土偶のデザインに表象される南東北の蔵王山麓を中心とする文化圏のつながりは、その後の地域社会にも引き継がれていったのです。



谷地遺跡の多彩な出土品。縄文土器は写真左から右へと変化し、装飾性を高めていきました。土偶は、山形県西ノ前遺跡で出土した国宝土偶「縄文の女神」と同じデザインを共有し、蔵王連峰を挟んだ活発な交流の様子を示しています。

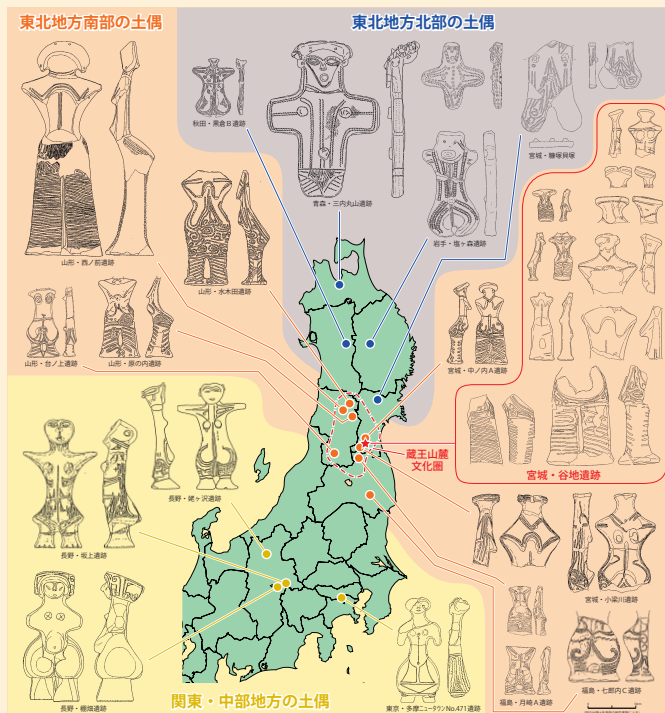
蔵王町の^{やち}谷地遺跡を
含めた蔵王山麓周辺の
縄文文化に関する調査

縄文中期の蔵王山麓文化圏とは何か？

研究の進展によって、縄文時代中期前半の蔵王連峰の東西に、祈りやまつりの文化を共有する集団が暮らしていたことが分かってきました。これを「蔵王山麓文化圏」と呼んでいます。その範囲は日本海側では山形県内陸部の最上から置賜^{もがみ}地域、太平洋側では宮城県中・南部の仙台西部から蔵王東麓、そして福島県北部の福島盆地までを含み、蔵王連峰を中心に東西約110km、南北約140kmの広がりを持ちます。

蔵王山麓文化圏を具体的に示すものは、祈りやまつりの道具と考えられる土偶や三脚型土製品、石棒、土製耳飾りなどの祭祀具・装身具（前頁写真左下）で、周辺地域の文化とは区別される特徴を備えています。特に土偶は、山形県西ノ前遺跡の国宝「縄文のビーナス」を代表例として「西ノ前型土偶」と呼ばれるタイプで、排他的とも感じさせる極めて強い独自性を発揮しています（下図）。また縄文土器においても、「大木式土器」と呼ばれるデザインを共有した南東北一帯の広範な土器文化圏の中で、北東北や関東、北陸の要素を取り入れながら独自のデザインを生み出し、発信した地域であったと考えられるのです。

蔵王連峰によって東西に隔てられ、往来も容易では



縄文中期の東日本各地で作られた土偶。北東北では自立しない板状土偶、南東北から関東・甲信地方にかけての地域では自立する立像土偶が作られました。このうち南東北の蔵王山麓を中心とした地域の土偶は、脚が長く長身で顔面に目鼻口を表現しないなど独自性の強い特徴を共有しています。

ない両地域に同じ文化が根付いたのは何故なのか。それは、降雪量などの気象条件の違いに加えて石器石材や海産物といった資源分布の異なる両地域の人々が相互補完的に連帯を強め、東西の物流・交流を活発化させていたからではないかと考えられます。

東西の物流の最たるものは石器の材料となる山形県側の珪質頁岩^{けいしつげつがん}でした。沿岸部を擁する宮城県側からは人の生活に不可欠な塩や海産物の加工品が運ばれた可能性が高いでしょう。「珪質頁岩と塩の道」とでも言うべき交易ルートによって、日常的な人とモノの往来があったと考えられます。

さて、こうした文化圏を越えてはるか遠くから運ばれたものもあります（下図）。近隣の拠点ムラどうしのネットワークは文化圏の外へも張り巡らされ、広範に物流・交流を繰り広げる社会でもあったのです。



谷地遺跡で出土した遠隔地の物資。南東北の土器文化圏を大きく越えた北海道や北陸、関東から様々な物資がもたらされていたことが分かります。近隣の拠点ムラどうしのつながりによって人やモノが移動し、遠隔地との直接・間接の交流を可能にするネットワークが発達していたと考えられます。

文化財トピックス

文化財講演会 縄文対談・蔵王山麓の縄文文化と谷地遺跡

～杉並の縄文人・岡村道雄氏と谷地遺跡調査担当者が縄文人の暮らしぶりを語る～

令和5年度文化財講演会「縄文対談 蔵王山麓の縄文文化と谷地遺跡」を令和5年12月16日、蔵王町ふるさと文化会館で開催しました。講師には「杉並の縄文人」こと岡村道雄氏(奥松島縄文村歴史資料館名誉館長、元文化庁主任文化財調査官)をお迎えし、蔵王町の谷地遺跡調査担当者との対談形式で開催しました。

岡村氏は、東北大学在籍中に町内の二屋敷遺跡などの発掘調査に参加。東北歴史資料館で東松島市の里浜貝塚の調査研究に従事した後、文化庁の主任文化財調査官として全国の遺跡で発掘調査の指導にあたり、重要遺跡の保存や最新の発掘成果を発信する「発掘された日本列島

展」などを手がけました。現在は「杉並の縄文人」として、時計を外し携帯電話や車を持たない生活を送り、出来るだけ自然状態の縄文人に近い暮らしを実践しているそうです。



対談では、蔵王町に初めて人が現れた旧石器時代から、縄文時代になって青麻山の裾野に最初のムラが作られ、やがて松川沿いの台地の上に谷地遺跡の大きな拠点ムラが営まれるまでの生活誌をたどり、自然環境の変化と縄文人がこの土地の気候風土に合わせて里山を育て利用してきたことが語られました。

また、谷地遺跡を含む蔵王連峰を取り巻く地域の縄文人たちは、同じ形の土偶や石棒を使ってまつりを行なう一つの文化圏に属しており、その蔵王山麓文化圏が南東北一帯に展開した大木式文化圏の発祥の地になっていたのではないかとする仮説が述べられました。

岡村氏の軽妙で分かりやすいお話に、会場の皆さんは蔵王山麓の縄文世界へと引き込まれた様子でした。



文化財展 蔵王山麓の縄文ムラⅡ

～松川流域の拠点集落遺跡の出土品を一堂に～

第24回文化財展「蔵王山麓の縄文ムラⅡ 一松川流域の拠点集落一」を令和5年10月14日から令和6年1月28日まで、蔵王町ふるさと文化会館で開催しました。

縄文時代中期に松川沿いの台地で営まれた3つの拠点集落を中心に取り上げ、発掘調査で判明したムラの様子や、出土した土器や石器、土偶など約270点を一堂に展示。令和5年3月にリニューアルした常設展示「谷地遺跡一蔵王山麓に営まれた縄文ムラ一」に並ぶ約500点と合わせて、縄文時代中期の蔵王山麓での暮らしぶりを示す約800点近くの出土品が並ぶ、町内ではかつてない規模の展示となりました。

会期中の11月4日には文化財講座「蔵王山麓の縄文遺跡と縄文人のものづくり」、12月16日には文化財講演会「縄文対談 蔵王山麓の縄文文化と谷地遺跡」を開催し、展示について理解を深めていただく機会となりました。



蔵王町の歴史と文化財 ときたん通信 No.007

令和6年(2024年)3月発行 [不定期発行]

蔵王町教育委員会 生涯学習課 文化財保護係

〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10番地

蔵王町役場東庁舎 文化財整理室内

TEL 0224-33-2328 FAX 0224-33-3831

E-Mail info@dokitan.com WEB https://www.dokitan.com